



カムイモシリを訪ねて

日高横断 ペテガリ岳～中ノ岳

大野

【日時】 平成20年12月28日(日)～1月2日(金)

【メンバー】 L大野

すべてを疑えといった人は、不思議な論理で神の存在を証明した。神は死んだと言った人は狂死した。真理を探求した人にはサイコロを振らない神がいた。日本には無神論者が多いらしいが、深く考え、なお神を否定できるのは余程強い精神である。仏神を待まずと言った人も、仏神は貴しと述べている。神秘などという言葉を経々に使いたくはないが、人智を超えたものの存在は、素直に信じてみたい。少なくとも、日高は人ならぬものの世界である。

カムイの国。カムイモシリ。八方塞がりの世の中で鬱々と過ごす中、俗世に穢れた身の禊を求めて、カムイモシリを訪れてみたくなった。遥かなペテガリ。その懐に抱かれて、旧友はどんな顔で迎えてくれるだろうか。

12月27日(土) 曇時々雪

朝一の飛行機で千歳に向かう。札幌でガス缶を仕入れ、のんびり帯広へ。吹雪のため列車が40分近く遅れたのは不吉な予兆か。年末の慌しさの中で、体調が芳しくない。中札内の旅館に泊。

12月28日(日) 曇り

6時にタクシーを呼び、遥かなペテガリの入口へ向かう。次第に明るくなる空は紫染みた赤。行く手の山脈はガスに隠れ、十勝平野の広大な雪原を風が吹き渡る。

積雪30cm弱。林道に入ってくれないかなあ・・・という儂い願いも空しく、最終人家で除雪終了。3度目となる赤い屋根の牧場と牛を眺めつつ、一人取り残された林道でスノーシューを身につける。不安を打ち払って出発。

雪の上には薄く轍の跡がある。踝程度の軽いラッセルであるが、やはり無雪期の速度は出ない。流氷を浮かべているように見えるポンヤオロマップ川の渓谷美を愛でつつ、のんびり歩いたこともあり、12～3kmの林道に4時間かかった。

見覚えのある道標を横。春の息吹に溢れた前回とは違い、冬の静けさの中、ジグザグの登山道に入っていく。積雪は30cm程度で道ははっきり分かる。尾根まで上がると傾斜は緩む。時折、ゴーっと風音がなるが、この辺りは静かなもの。尾根を南下し高度が上がるに従い、顕著に雪の量が増えていく。25日に降ったのであろう新しい雪であるが、あまり軽い雪ではない。体調も万全ではないので、843の先でさっさと店仕舞とする。

12月29日(月) 晴れのち曇時々雪

朝は4時に気象。明るくなるのを待って出発。天気は穏やか。本日の目標ポンヤオロマップもよく木々の隙間から見える。1000mを超えるころから、ラッセルはひざ下程度になる。スノーシューとはいえ、一步一步の歩みはきつい。

1058からは山頂が遥かに高く聳え立ち、行く手の厳しさを予感さる。頂上直下は、急で所々岩も出ている。かつて足を滑らせたのはこの辺りであろう。残置ロープを頼りに

左側から回り込んでイヤラシイ急斜面をよじ登ると、傾斜は緩んだ。山頂に立つと手前の早大尾根がはっきりと姿を現し、奥に主稜線がガスをたなびかせている。この先が東尾根の核心だ。

急斜面を下り、尾根が細くなった辺りに小さなスペースを見つけ、幕



【ポンヤオロマップ岳】

12月30日(火) 雪

夜半から雪が降り、20cm程積もっている。雪は降り続けている。しばらく細い尾根が続く。スノーシューの幅より狭い尾根だが、ラッセルは一層きつくなる。1417への登りにさしかかると、尾根が広がり体力勝負。ゆっ

くり歩いているのだが、すぐに息が上がる。雪が降り続き、次第にラッセルが厳しくなってきたような気がする。1417を1518と間違えかけるなど、頭が希望的観測の巔に落ちている。ようやく1518が間近に迫る辺りはテン場適地。今日も早目に切り上げてという思いが頭を過るが、ここで泊まるようでは情けない。

早大尾根を合わせ、尾根は西に曲がる。戦後間もない時期に極地法を駆使して、1ヶ月かけて厳冬期ペテガリ第二登を果たした先人の労苦を思うと、同じ時期に一人来ていることが恐ろしくなる。

ここからは、地図で見る以上にギャップが深く、予想以上に大変だ。時折現れるナイフフリッジは、なぜがヤブにつかまっていける。しかし、下手に足を置くとナイフが崩れるので、一步一步慎重に足を置いていかざるを得ない。雪庇が出ている所もある。やぶを避けて雪堤寄りに体重を預けると、ビシッと亀裂が走って雪庇が落ちる。ヤブにしがみついて落下を逃れる。落ちて怪我はしないであろうが、復帰するのは苦労しそう。牛の歩み。稜線上のヤブも厳しく、時折現れる岩と一緒に歩みの邪魔をする。次第に風が強まり、雪も混じるが、張れそうな所はない。不安、後悔、焦燥。辛くとも、行くしかない。

ヤブとナイフを避けて、小ギャップをトラバース。急斜面の雪は少ないが、ヤブにつかまって進むのは厳しく、休み場所もない。・・・枝の隙間に鮮やかな色。ピッケル。それほど古いものには見えない。なぜ、こんな所に？周囲を丁寧に探す余裕はなかった。周囲をザッと見回して、不審なものはない。それだけ確認して、後は必死に進み、何とか尾根に戻った。

1580付近は、雪が堅くなり、ペース上がる。明日の主稜線はサクサク行けるかもしれない。しかし、今日の泊まり場はあるのだろうか……。それでも、1525の手前の小ギャップの狭間に、何とか一人テンが張れる隙間を見つけ、そそくさと整地をして、テントに入った。北側に小さな雪の吹き溜りがあり、冬型の風は多少避けられそう。意外なことに、AUの電波が通じた。

12月31日(水) 曇り時々晴れ

夜は風が強い。冬型が決まってきたか。今日は厳しい歩きになりそうだ。テルモスに熱い紅茶を注ぎ、目出帽、手袋を確認し、準備万端整える。テントを這い出ると霧氷が

付き、ガスも出ている。昨日頑張ったので、主稜線まで距離にして3cm。1時間程で主稜線と
思っていたのだが・・・。

昨日の最後の状況から、アイゼンを付けて歩き始めるが、いきなり腰ラッセル。時に胸までもぐる雪に耐えかね、早々にスノーシューに変更。しかし、ガスの中、強風に煽られると思っていた天気は大したことなく、あろうことか、明るくなり、主稜線方面のガスも切れていった。新雪が朝のキラキラした光の中で輝き、ペテガリがわずかに朱に染まる。まさにカムイミントラ！このチャンス逃してなるまいと先を急ぐが、足に絡みつくとヤブと雪は前に進ませてくれない。すぐそばだったはずの1573が、やけに遠くに見える。

結局、主稜線まで3時間近くかかった。ここで一思案。空は、青空が見えるも、嫌な雲も多い。風は激しくはないが、雪を飛ばしている様子も見える。ペテガリは時々ガス。西尾根に逃げる必要はない。ペテガリにザックを背負っていくべきか・・・。何とかなるだろう。迷った末に、必要最小限のものをポケットに詰め込んで、空荷でペテガリへ向かうことに。

主稜線は、エビの尻尾が発達し、表面も氷化している。これなら楽だが、世の中そんなに甘くない。表面が凍った雪も、3歩に1歩は膝上までもぐり、泣けてくる。それでも、空荷なら何とか足も出て、一步一步足を運んでいくと傾斜が緩み、思いのほか雪が積もった山頂に立つことができた。5度目のペテガリ。旧友は、穏やかな笑みを浮かべて迎えてくれた。

学生時代、先輩から譲ってもらった「北の山の栄光と悲劇」という本の第1章は、ペテガリ初登の物語。悲劇を乗り越えた北大山岳部が「氷の尾根にアンザイレン♪」と歌った清き頂に立った。北を見れば1839からヤオロにいたる山稜。更に北はガスの中だ。南はカムイ・ソエマツ・ピリカ皆見える。熱い紅茶を啜り、感慨を噛締める。ソエマツから先は、最早届かぬ夢となったが、カムイまではいけるであろう。

1573まではトレースをたどり、南下を開始する。しかし、1314を越えて、あわよくば中ノ岳までなどという思いを嘲うかのように、下降を開始したとたん、いきなり足が潜りだし、腿ラッセル。どうにもたまらず、スノーシューに履き替え。昨日降った雪が40cmほど積もっており、決して軽くない。しかも、その下の層



【朝焼け燃ゆるペテガリ】



【ペテガリから北を望む】



【中ノ岳から東尾根を望む】



も時々踏み抜き、歩きづらい。細い尾根を雪庇に注意しつつ歩く。1469 から先は、なだらかな深雪の尾根。一気に下って最低鞍部で力尽きた。雪庇の陰に格好のテン場を見つけて幕。

1月1日(水) 晴れ時々曇り

カムイ岳まで行くためには、今日中に1493 先の中間尾根分岐が最低ライン。早立ちして一気に一登り。今日もラッセルは深い。今日も冬型がバッチリ決まっています、北海道の日本海側では激しい風が吹いているはずなのに、風は決して激しくない。1314 からは中ノ岳が聳え立つ。ひざのラッセルに息は上がるが、東尾根と違って歩きやすい素直な稜線で順調に進む。標高が上がり、傾斜が増すとともに、ウインドクラストした表面を堅さが増す。1450m 付近でアイゼンをつけ、ガシガシ行ける！と思ったら・・・。腿まで潜る。10 歩歩いて、爪で登れるのは2 歩もない。急傾斜を這松につかまりつつ、一步一步登るが遅々として進まない。わずか100m 弱の登りに1 時間近くをかけて中ノ岳にたどり着くと、カムイ、ソエマツ、ピリカと続く稜線が脈々と続いていた。何とかカムイまでは行きたかったが、このまま1493 を超えられる確信がもてなかった。天気も昨日今日の幸運が明日も続くと保証されるわけでもない。潮時か・・・。カムイ山荘へのエスケープを決断。悔しいけれど仕方がない。

1445 までは概ね穏やかな稜線散歩。相変わらずラッセル。山頂で、ペテガリに別れを告げた。主稜線はわずかししか歩けなかったが、やるだけのことはやった。悔いはない。

ここからは、尾根を一気に駆け下る。上部が少し急で、スノーシューではバックステップとなった。ヤブもなく、素直な下りなので楽だ。主稜線が次第に高くなり、ヒマラヤ壁をまとった山肌に氷瀑も見えている。

千メートルを切る辺りから、次第に雪が減っていくのを感じ、850m 付近からは、時折雪を踏み抜いて笹藪に引っかかるようになる。これまた結構疲れる。

750 からは、大倒木帯となり、台風被害でもあったのかな、と思っていたが、やがて、人の手が入ったの倒木と確信。悲しいことにこれも日高の現実だ。いつの間にかカムイモシリから人の世界に戻ってきていた。700m 付近からはブル道を辿り、鹿のトレースを



使わせてももらいながら、最後はシュオマナイ川右岸の登山道を10分ほどで渡渉点に出た。暖かいような気がしても、そこは厳冬期。水量は少なく、一番広い所なら最深で踝程度の流れ。靴下を濡らすことなく渡れた。

この先、スノーシューを外したまま歩くと膝上のラッセル。積雪は70cm程度。すぐかと思っていたら、意外と時間がかかり、10分ほどで神威山荘に到着。記憶では樹林の中であったはずなのに、雪原にポツンと立っていた。伐採が入ったのであろう。予期に反して誰もおらず、新しいトレースもなし。細薪がなくて少々苦労したが、ストーブに火をつけ、快適な一夜を過ごさせてもらった。

1月2日(金) 晴れ

安全地帯に戻ってきた安心感と小屋の快適さに、思わず朝寝坊。しかし、ここからはまだ果てしない林道歩きが待っている。

今日も天気はよい。ラッセルは膝程度だが、林道にはうっすらとトレースがあり、これを辿れば歩きやすい。1時間も歩くと、次第に雪は減ってきて、30~40cm程度。ブル道が、山の生傷に見えて痛々しい。

元浦川の本流を渡り、すぐに本流沿いの林道と合流するが、何と車の入った跡がある。さらに、しばらく行くと、前方から車が入ってきた。こんな所に何をしに来ているのであろうか。さらに、30分ほど歩いていると、先ほどの車が戻ってきて「乗っていけ」と言ってくれた。何とありがたい。聞けば、地元で牧場をやっておられる方々で、鹿撃ちに来ているとのことで、荻伏駅まで送っていただいた。今日中に、何とか交通機関のある所まで辿り着ければいいと考えていたので、お二人には感謝の念に堪えない。

その日のうちに、新冠の温泉まで行って1週間の疲れを癒した。

結果的には体力不足でカムイ岳にも届かなかった。とはいえ、苦しいラッセルの末に日高を横断し、ペテガリを足下にした感慨と、精一杯やったという思いで悔いはない。どれだけの禊となったかは分からないが、カムイモシリの空気に触れ、少し心が洗われたことは間違いない。新しい年になっても、妥協と後悔を繰り返してはいるが、時にこういいう山に行きたいものだ。

- 【行程】 12/28 最終人家 (6:25) - 登山道 (10:55) - 843付近C1 (14:00)
12/29 C1 (6:20) - P1119 (8:45) - ポンヤオロマップ岳 (13:45) - C2 (14:10)
12/30 C2 (6:20) - P1518m (11:40) - P1522 C3 (15:50)
12/31 C3 (6:15) - P1573m (9:00) - ペテガリ (10:20) - 最低鞍部C4 (14:30)
1/1 C4 (6:00) - 中ノ岳 (9:15) - P1445 (11:20) - カムイ山荘C5 (14:45)
1/2 C5 (8:00) - ゲート付近 (11:55) - 13:00荻伏駅

【地図】 拓進、歴舟川上流、神威岳、ピリガイ山、元浦川上流